
共通教育科目「実用医療英語」を実施

▶岸 太一

グローバル化や医療ツーリズムの影響により、近年、日本語を母語としない患者の診療機会が増えている。また、2年後の東京オリンピック・パラリンピックでは多くの外国人の訪日が予想されている。その中には訪日中に医療にかかる必要が生じる者もいるであろう。そのような患者への対応能力を身につけることを目的として、本年度も実用医療英語を開講した。なお、今年度より、健康科学部の学生も参加できるようになった（履修状況は全学部合計で10名）。

この科目では在日外国人の医療事情や医療に対する考えを理解することを重視した授業を展開してきたが、今年も同様の趣旨のもと、英語によるコミュニケーションスキルの向上をめざした。また、在留外国人との面談演習の際に、英語スキルの貧困さから、英語に堪能な学生に面談の進行を任せてしまう学生に対して、積極的・能動的にコミュニケーションをとるよう

に働きかけた。今年は例年に比べ履修学生が少なかったため（例年は20～30名程度）、個々の学生のコミュニケーションが例年よりも増えていたように思われた。

医療の実践において、患者やその家族等の心理・社会的背景を理解し、尊重することが求められることは言うまでもない。そして、それらを理解するためには、相手に話してもらう必要がある。学生は、自分たちとは異なる社会的・文化的背景を持つ外国人の方々を理解し、自分の思いや考えを伝えることに一生懸命に取り組む様子が見られた。この経験が卒業後のそれぞれのキャリアで活かされることを願う次第である。

【実施日】5月12日・26日、6月2日・16日（各土曜日）
1日4コマ（10:30～12:30、13:30～15:30）

（医・教育開発室・講師）